

地域文化とストーリー

日本遺産にみる物語化の手法

平成30年8月25日(土)
アーバンデザインスクール前期講座(第3回)

丁野 朗

観光未来プランナー
東洋大学大学院国際観光学部客員教授
ANA総合研究所シニアアドバイザー

0. はじめに(自己紹介)

環境から観光へ(キーワードは「静脈」再生だった)

●スタートは「公害」研究から

- 1972年(昭和48年)3月大学卒業。マスコミ志望ながら、結果的に学生時代から関心の強かった「公害(環境)」を志す。
- 同盟通信社(当時)の先輩と環境問題のシンクタンク設立(現経済産業省所管)

原点となった別子銅山(写真は四阪島)



●余暇(静脈)研究に従事

1990年(平成2年)(財)余暇開発センターに移籍(研究開発部)

■「いい夫婦の日」の提唱・事業化(平成3年)

■「トリプルバカンス」の提唱(平成4年)のちの「ハッピーマンデー」

■「静脈空間」研究 産業遺産の再生・活用などのテーマ研究(1995年～)から

2000年(平成12年)全国近代化産業遺産活用フォーラム(新居浜)

2001年(平成13年)全国産業観光フォーラムin名古屋・愛知の開催

*以来「産業観光」を通じた地域創生の仕事に深く従事

●故佐橋滋さん(小説「官僚たちの夏」「異色官僚」との出会い (元通産省事務次官・余暇開発センター理事長)

小樽運河論争と佐橋滋さん

「歴史的投資」(Historical Investment)の言葉を示して運河埋立てを牽制

「投資とは本来、現在の消費を抑え、後日に喜びや恩恵を与えてくれる。それは長い歳月や歴史だけが創りだせる投資で、後々まで人々に精神的喜びや感動を与えてくれる」(佐橋滋講演録より)



●故木村尚三郎先生との出会い(元東京大学名誉教授)

「ふりかえれば未来」

「進歩・発展」の時代が終わり、人びとが「安心・結び合い」を求め始めた世紀末。先行き不透明な現代を生きる方針を、歴史の中に探った名著



●須田寛さん(JR東海初代社長・リニア新幹線提唱者) との出会い

- ・新居浜の全国産業観光サミット(2000年)での出会い
- ・愛・地球博(2005年)の開催に向けて、「産業観光サミットin名古屋・愛知」で、初めて「産業観光」を提唱
- ・「全国産業観光推進協議会」の発足(2001年)



●「余暇総研」の設立

■余暇開発センターの事務所閉鎖に伴い、2003年(平成15年)(財)社会経済生産性本部移籍(現日本生産性本部)「余暇総研」(新研究所)設立

「いい夫婦の日(11月22日)」の提唱・実現

「ハッピー・マンデー」の提唱と実現

(1998年/「成人の日」「体育の日」、2001年/「海の日」「敬老の日」)

●余暇から「観光」へ

■2008年4月、観光庁の発足に伴い(公社)日本観光振興協会に移籍(総合研究所 所長。常務理事)

■2007年～2008年 近代化産業遺産33群・続33群の認定(経済産業省)

■2015年～現在 日本遺産の認定事業(文化庁日本遺産認定委員)

*2017年(平成29年)日本観光振興協会を退職(特別研究員として継承)

*2018年(平成30年)全国産業観光推進協議会副会長

●現在の主要業務

■株式会社 ANA総合研究所シニアアドバイザー(2017年1月より)

■東洋大学国際観光学部客員教授ほか、法政大学キャリアデザイン学部、跡見学園女子大学観光コミュニティー学部(演習)など

■文化庁日本遺産選定委員、経済産業省産業構造審議会臨時委員など

■広島県呉市顧問(くれ観光未来塾長)ほか、高知県、兵庫県、北海道庁、栗原市、越谷市、舞鶴市、三木市などで観光アドバイザーなどを務める

■日本商工会議所観光専門委員会学識委員ほか

地域文化とストーリー

日本遺産にみる物語化の手法

第1講 地域には何故「物語」が必要か??



第2講 日本遺産にみる物語化の手法



第3講 ストーリーを活かす手法とは



1. 地域には何故「物語」が必要か??

～観光客は「鳥の目」でやってくる～



「**魔女の宅急便**」に出てくる街「**コリコ**」のモデルはストックホルムとヴィスビュー（ゴットランド島）といわれている

- 観光とは典型的な「**物語消費**」である
- その物語をもとめて、遠方から来る来訪者は「**鳥の目**」でやってくる。
- だから、地域の地形と歴史を俯瞰する編集視点が重要である。

滋賀県イメージ



とあるブログから引用
関東以北の人々の一般的なイメージ草津
がどこにあるかなどは全くの謎
むしろ草津と言えば草津温泉(群馬県)

(1) 地域を俯瞰した人(大正広重・吉田初三郎)

●「大正の広重」といわれた吉田初三郎の作品

吉田初三郎 画 近畿を中心とせる名勝交通鳥瞰図(大正15年)

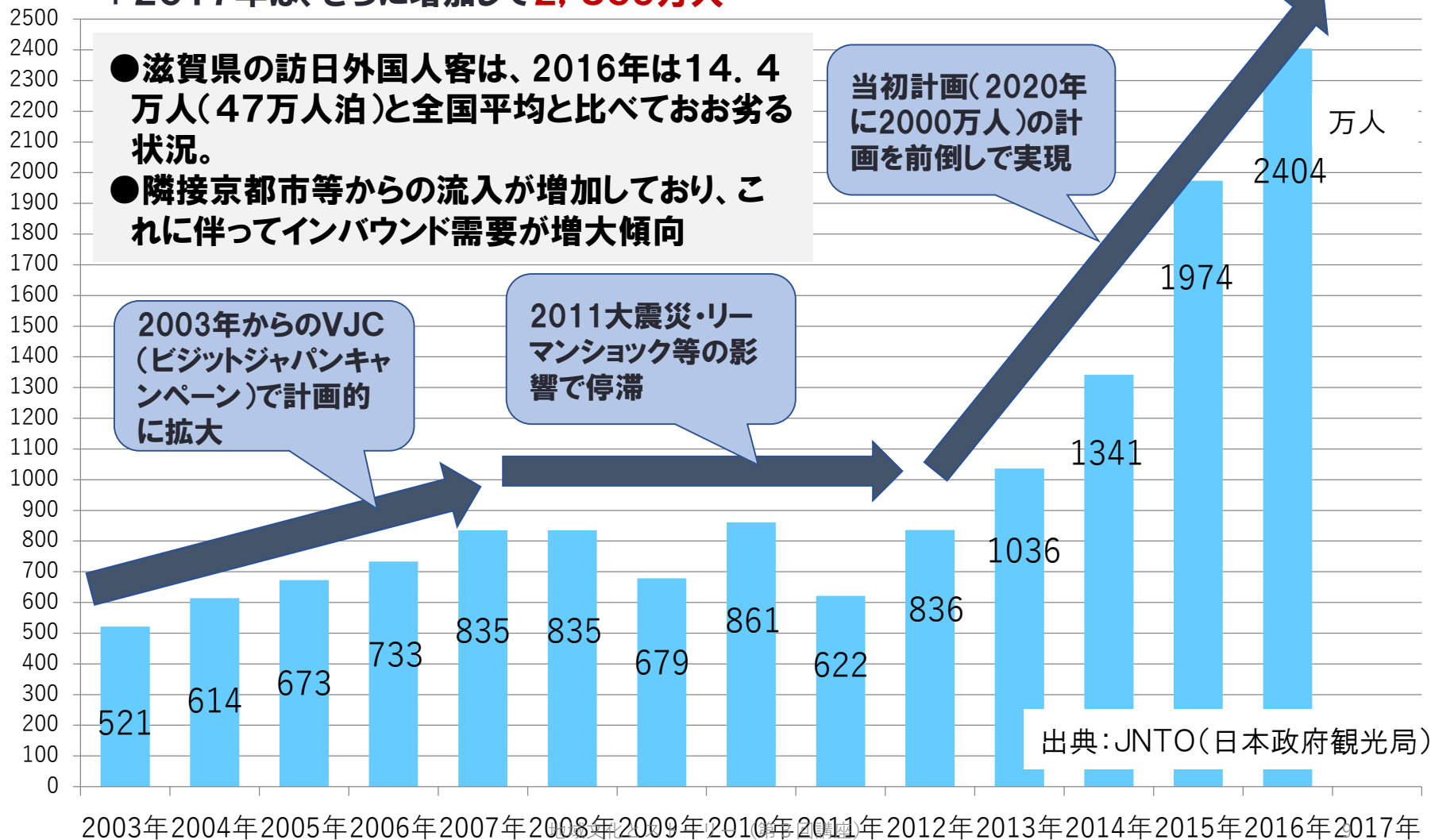
大正末頃から、鉄道、航路の発達で、観光地の開発や宿泊施設の整備が進められ、戦前の旅行、観光ブームが生まれ、初三郎はこの時流に乗り、各地の鳥瞰図を描いた。この作品は『大阪毎日新聞』の附録としても刊行され、広く頒布された。各地の名勝と鉄道等の交通図を組み合わせたこの絵図は、初三郎式鳥瞰図の最も特徴的な作品と言われる

●初三郎は大正から昭和にかけて活躍した鳥瞰図絵師。生涯3000点以上の鳥瞰図を描き、「大正広重」と呼ばれた。「初三郎式絵図」と呼ばれる独自の作風の特徴は、見えないはずの地域シンボルの山や海と対照的に、細かい路地が描かれるなど、大胆なデフォルメや遊び心にある。まさに **旅人を誘う目** である。

(2)その鳥たち(訪日外国人客)は劇的に増えている

- 2016年の訪日外国人旅行者は、2404万人で前年比16.4%増加。4年連続で過去最高を更新。国際旅行収支は2014年の段階で1兆円を上回る過去最高の黒字。

***2017年は、さらに増加して2,869万人**



鳥たちの増加に向けた、新たな目標値への挑戦！

明日の日本を支える観光ビジョン(平成28年3月)

訪日外国人旅行者数	2020年 4,000万人 (2015年の約2倍)	2030年 6,000万人 (2015年の約3倍)
訪日外国人旅行消費額	2020年 8兆円 (2015年の2倍超)	2030年 15兆円 (2015年の4倍超)
地方部での外国人 延べ宿泊者数	2020年 7,000万人泊 (2015年の3倍弱)	2030年 1.3億人泊 (2015年の5倍超)
外国人リピーター数	2020年 2,400万人 (2015年の約2倍)	2030年 3,600万人 (2015年の約3倍)
日本人国内旅行消費額	2020年 21兆円 (最近5年間の平均から 約5%増)	2030年 22兆円 (最近5年間の平均から 約10%増)

現在の2倍・3倍の訪日外国人客の受入れには、文化財などの積極的活用方策をはじめ、これまでの観光の仕組みを抜本的に改革する大胆な手法が不可欠である

地域文化資源の抜本的活用が大きな鍵

「観光先進国」への「3つの視点」と「10の改革」

明日の日本を支える観光ビジョン
(平成28年3月)

視点1

「観光資源の魅力を極め、
地方創生の礎に」

■「魅力ある公的施設」を、ひろく国民そして世界に開放

- ・赤坂や京都迎賓館などの大胆な公開・開放

■「文化財」を観光客目線で保存優先から「活用」へ

- ・2020年までに文化財を核とする観光拠点を全国200整備など。

■「国立公園」を世界水準の「ナショナルパーク」へ

- ・2020を目標に全国5箇所の公園について体験・活用型の空間へと集中改善

■おもてなし観光地で「景観計画」で美しい街並みを

- ・2020年を目標に、原則として全都道府県・全国の半数の市区町村で「景観計画」を策定

視点2

「観光産業を革新し、国際競争力を高め、わが国の基幹産業に」

■古い規制を見直し、生産性を大切にする観光産業へ

- ・古い規制・制度の抜本見直し、経営人材育成、民泊ルール整備、宿泊業の生産性向上などの推進・支援

■新しい市場を開拓し長期滞在と消費拡大を同時に実現

- ・欧州・米国・豪州や富裕層へのプロモーション、戦略的ビザ解禁等
- ・MICE誘致支援の抜本的改善
- ・首都圏におけるビジネスジェット受入環境改善

■疲弊した温泉街や地方都市を未来発想の経営で再生・活性化

- ・世界水準のDMOを100形成
- ・観光地再生・活性化ファンド、規制緩和など民間力の活用

視点3

「全ての旅行者が、ストレスなく快適に観光を満喫できる環境に」

■ソフトインフラを飛躍的に改善し世界一快適な滞在実現

- ・技術活用による出入国審査
- ・ストレスフリーな通信・交通利用環境
- ・キャッシュレス観光の実現

■「地方創生回廊」を完備し、全国どこでも快適旅行を実現

- ・「ジャパンレールパス」を訪日後でも購入可能化
- ・新幹線開業やコンセッション空港運営と連動した観光地アクセス交通の実現

■「働きかた」と「休みかた」を改革、躍動感溢れる社会実現

- ・2020年までに、年次有給休暇取得率を70%へ向上
- ・家族が休暇をとりやすい制度の導入、休暇取得の分散化による観光需要平準化

(3) 観光は「物語消費」 ～映画「北の国から」と富良野～

●美しい自然や祭りなどはあったが、北海道富良野市は過疎に喘ぐ村だった。

●その富良野で、テレビドラマ『**北の国から**』が1981年から放送。

東京から故郷の北海道に帰郷して、大自然の中で暮らす一家の姿を描いたドラマ。脚本は倉本聰。主演は田中邦衛。当初の連続ドラマ放送後、8編に及ぶドラマスペシャルが放映された。『2002遺言』をもってシリーズは一旦終了。

●やがて富良野は日本中に知られるようになり、過疎の村だった麓郷地区には第1作放送直後から、休日になると数百人の観光客が見物に訪れることとなった。最終作が放送された2002年度には**249万人**が訪れている



昭和17年頃の「富良野駅」開業当時を再現した「富良野・ドラマ館」とラベンダー畑



観光は「物語消費」。優れた物語そのものが地域ブランドとなる

(4)地域産業のストーリー化

～近代化産業遺産物語とその活用～

経済産業省は、平成19度、20年度の2年間の調査で、全国1115の施設を認定、これらを合計66のストーリーとして整理した。現在、次の活用手法を検討している。

(経産省HP参照 <http://www.meti.go.jp/press/20071130005/20071130005.html>)

とりまとめの軸となった66ストーリーの一例

◆story1 時代を突き動かす熱意と創造力

近代黎明期の技術導入の歩みをものがたる近代化産業遺産群
(尚古集成館(鹿児島)、長崎造船所、築地・萩・葦山反射炉など)

◆story3 「最適解」を見つけろ

鉄鋼国産化に向けた近代製鉄業発展の歩みを物語る近代化産業遺産群
(八幡製鉄所、河内貯水池、釜石鉱山・橋野高炉跡など)

◆story5 人と文化の交差点

外貨獲得と近代日本の国際化に貢献した観光産業草創期の近代化産業遺産群
(日光金谷ホテル、箱根富士屋ホテル、旧甲子園ホテル、旧帝国ホテルなど)

◆story13 官から民への発信

『上州から信州そして全国へ』近代製糸業発展を物語る富岡製糸場などの近代化産業遺産群(富岡製糸場、新町紡績所、諏訪製糸・片倉館、グンゼ記念館(京都)など)

◆story24 京の都を再興せよ

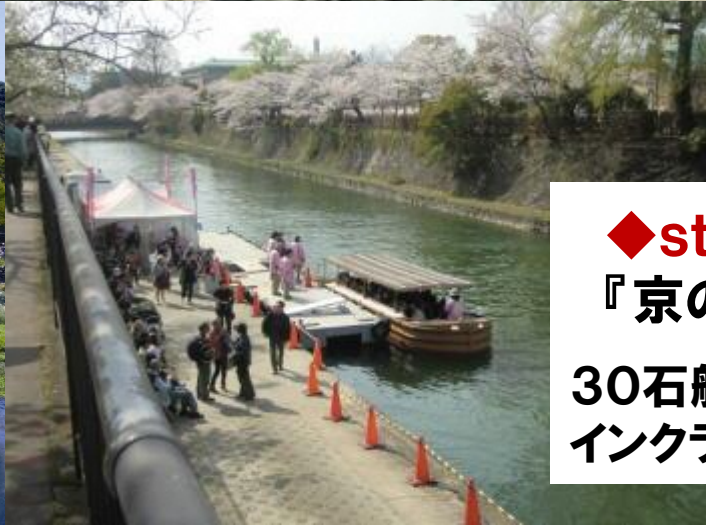
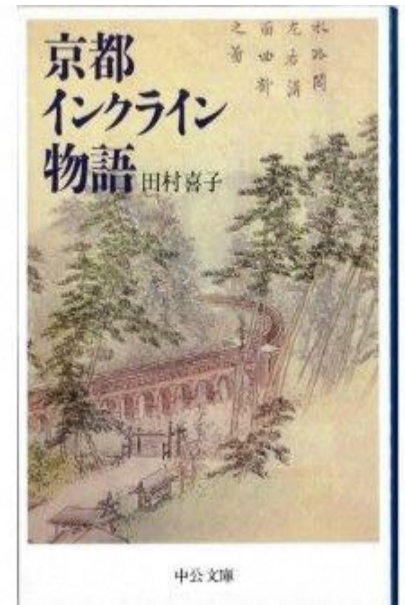
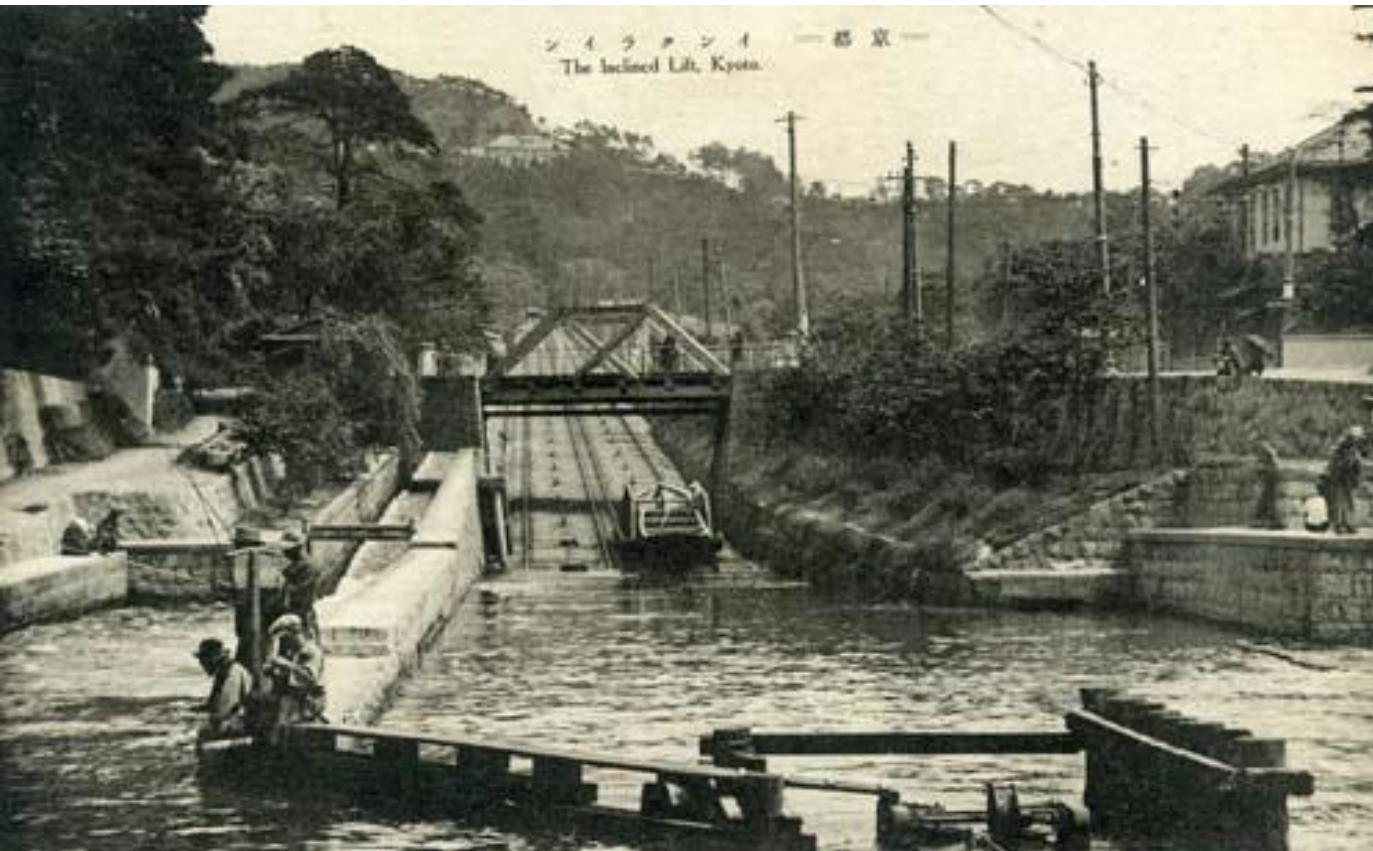
近代京都の礎を築いた琵琶湖疏水などの近代化産業遺産群
(琵琶湖疏水、水路閣、蹴上インクライン、蹴上発電所、島津創業記念資料館など)

HERITAGE OF MODERNIZATION Story.24

京都における産業の近代化の歩みを物語る琵琶湖疏水などの近代化産業遺産群



- 東京遷都により京都の産業は急激に衰退。政府による勸業基金の貸与などにより、外国人技術者の招聘や勸業施設の設置、留学生派遣による技術・機械の導入、博覧会開催など積極的な勸業施策を展開、西陣の機業を始めとして各産業とも立ち直りを見せた。この間、精密機械器具製造の魁となる島津製作所も創業され、後に同社が医療用のX線装置、蓄電池などで新分野を切り開く礎が整えられた。
- 明治中期には、琵琶湖疏水を開削することにより、京都への舟運を開き、同時に動力、灌漑などに利用、産業の振興を図るべく琵琶湖疏水が造られた。さらに日本初の商用水力発電所が建設され、蹴上インクランの動力源となった。これら事業は、この後、わが国初の路面電車の開通や紡績、伸銅、機械などの新産業の振興に力を発揮、京都の産業発展に大きく貢献した。



◆story24

『京の都を再興せよ』

30石船を乗せて運んだ京都
インクライン

始まった琵琶湖疏水 観光通船事業

琵琶湖疏水竣工125周年にあたる2015年，京都市と大津市を結ぶ通船を試行事業として社会実験を実施。今年（2018年）から、本格通船が始まった。

